



「お客様の細かな要望にもきちんと応えていきたい」と話す山本社長。

ださい。

らどれくらいまで薄くできるのかを試行錯誤しながら作りました。最初は15ミリの厚さでしたが、最終的には5・5ミリまで薄くすることできました。

木というのは二酸化炭素を吸収して酸素を排出しますが、成熟した木というのは、二酸化炭素の吸収量が減り、酸素を排出しなくなります。そうなった木は切って、木製品として活用し、木を切ったところには新たに木を植える、その

合板ベッドの開発は、新たなチヤレンジだったと思いますが。



白糠工場と恋間工場を合わせて164人の社員がいます

木がまた二酸化炭素を吸収して酸素を排出する、この循環が大切なのです。ただ闇雲に木を切ればいいというのではなく、成熟した木を切って新たに植えていけば、地球上には非常に良いのです。ですから、近年はあらゆるところで木材を使用するという傾向が強くなってきました。



札鶴ベニヤ恋問工場。TEL：01547-5-2136
他の自治体や民間会社からも合板ベッドを購入したいとの問い合わせがあるそうです

は新たなチャレンジだったと思します。我々は天然の木にこだわったモノづくりをしており、そのほとんどが受注生産です。お客様の要望を聞きながら一緒に開発していく「オーダーメイド生産」を得意としていますので、今回の合板ベッドもそうした要望に応えることができたとうれしく思っています。また、合板の用途も広げることができます。木材は高いポテンシャルを秘めていますので、今後も合板を使つたいろいろなモノづくりに挑戦していきたいと思っています。

白糠町と札鶴ベニヤ株式会社（山本純也社長）が共同開発した「避難所用合板ベッド（以下、合板ベッド）」が完成し、本年5月15日に開かれた釧路管内防災担当者会議において披露されました。また、株式会社町おこしエネルギー（沼田昭二会長）からは、こうした町の取り組みに理解をいただ

き、合板ベッド500台を寄贈していただきました。

町では8月13日、この合板ベッドを旧河原小中学校の体育館に備蓄し、これまでの段ボールベッド400台と合わせて、900台の避難所用ベッドを備蓄しました。避難所用品は、災害がなく使わされることがないのが一番ですが、

いざというときのために備えておくことが大切です。また、その使い方や特徴などを知っておくことが必要です。

合板ベッドを開発するにあたって最も難しかった点はどこですか



8月13日に札鶴ベニヤ恋問工場から、札鶴ベニヤ社員と役場職員とで合板ベッド（写真右下）500台を旧河原小中学校の体育館に備蓄しました。いざというときに備え、ベッドを避難所へ運搬する方法も考慮しておく必要があります。